



公益社団法人 日本柔道整復師会（日整）の会員は全国に約 17,000 人。様々な場所で技能を生かして活躍しています。その名も「日整 Man/Woman」の活躍ぶりを、紙面およびホームページで報告いたします。



氏名 田島 隆行（たじま たかゆき）

所属 公益社団法人群馬県接骨師会

会員歴 平成 8 年 7 月入会

一言 東北柔専卒業後前橋の関口整形外科病院にて 5 年間勤務。その後、実家の田島接骨院へ就職。仕事と柔道に追われ忙しい日々を過ごしています。

趣味は旅行、バイク。好きな言葉「力必達」。

## 02. 日整は熱意ある人の集まり！

### 日赤と共に被災地へ

私が日整に入会したのは、祖父と父が亡くなり田島接骨院・田島道場を継承した平成 8 年 7 月でした。あれから早いもので 17 年になります。

しかし、これまで日整の活動といえば、日整全国柔道大会での「形」の演武や審判員として柔道関係の行事に参加する程度でした。

そんな私が東日本大震災を受けての救護活動やモンゴル国指導者派遣に参加させて頂いて感じたことなど拙い文章ではありますが皆さんに少しでも伝わるように書かせていただきます。

公益社団法人群馬県接骨師会は、平成 12 年に群馬県接骨師会赤十字奉仕団に認定され中越地震の時にも活動し、現在に至っています。

そして、東日本大震災で私が岩手県釜石市に赴いたのは、日本赤十字社群馬県支部第 18 救護班の一員としてでした。

前橋赤十字病院の医師 2 名、看護師長 1 名、看

護師 2 名、主事 2 名、薬剤師 1 名、支部調整員 1 名、柔道整復師 1 名の計 10 名で構成された班で 5 月 4 日から 8 日迄の 5 日間行動を共にしました。



写真 1. 日本赤十字社群馬県支部第 18 救護班

今まで訓練には毎年参加していましたが、実際の現場へ行くのは初めての経験でした。被災した方々のために何が出来るのか、という大きな不安を抱いたままの私の目に飛び込んで来たのは、テ

レビで見るよりもずっと悲惨な光景でした。



写真2. 民宿の屋根に乗り上げた遊覧船「はまゆり」

発生より2ヶ月後の被災地では、外傷よりも避難所生活による疲労が多く、肉体的な痛みはもちろん精神的なストレスを訴える人々が多かったです。

そんな私の「痛みや不安を取り除いてあげたい」という思いが手から伝わったのかはわかりませんが、東北の我慢強く寡黙な人達が、少しずつ語り始め、ある避難所を巡回した時に、真っ先に私の所へやってきた年配の女性から「群馬の巡回の時は、ほねつぎの先生が同行しているので今日を楽しみにしていました。」と言って、見せてくれた笑顔に、今までの取り組みはムダでは無かったことを実感しました。

今年の3月11日で2年経ちますが、新聞によると現在死者15,882名、行方不明者2,668名、避難・転居者は、315,096名と出ていました。亡くなられた方々のご冥福を祈ると共に1日も早い被災地の復興、被災者の生活再建を願います。

## モンゴル国指導者派遣

このプロジェクトは日整とJICAが、共同で行っている草の根技術協力です。

私は、このプロジェクトに2011年9月と2012年2月の二回参加させて頂きました。

これまでこのプロジェクトに携わった日整の先生方の努力により柔道整復術がモンゴル国全

土に広がりつつあります。

今迄、モンゴル国では骨折して腕や足が変形するのは当たり前、脱臼して関節が動かないのは当たり前でした。しかし、我々が行って柔道整復術を指導することにより外傷に対する適切な整復・固定を行うことができるようになり、変形治療や関節機能障害で困る人が一人でも減ればモンゴル国のケガをした人の社会復帰率は格段に向上することは間違いありません。

私は、柔道の選手として日の丸をつけて試合に出場することは出来ませんでした。この派遣中は背中に日の丸が入ったジャージを着て活動することができ、素晴らしい経験になりました。



写真3. Japan ユニフォーム

## 若い柔道整復師の先生方へ

人はそれぞれ考え方や目標が違い、これまで歩んできた人生も様々です。共通点はあるかも知れませんが、同じ人間は絶対に存在しません。だから、個性があり、自分にしか出来ないことが必ずあるはずです。

日整はそんな熱意あふれる先生方が集まり、様々な公益活動をしている素晴らしい組織です。

最後になりますが、多くの先生方に是非日整に入っていただき、被災地での救護活動や国際活動など、柔道整復師として素晴らしい体験を沢山していただきたいと思います。